降誕節第一主日 12 月第 5 週説教　2013.12.29

聖家族

マタイ 2 章 13-15、19-23 節

占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

　ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。（朗読終わり）

クリスマスを境に待降節から降誕節となりました。きょうは今年最後の主日礼拝「聖家族」の祝日です。あまりなじみのない人もいるかもしれませんが、イエス･マリア・ヨセフの 3 人家族を教会は伝統的に聖家族と呼んで家族の模範としてきました。聖家族はラテン語ではサクラダ･ファミリアといいます。アントニオ・ガウディが設計した完成途上のスペインにある教会の名前はここからとられています。

＜夢のお告げ＞

2:13 占星術の学者たちが帰って行くと･･･

東方から来た占星術の学者たちは誕生したイエスに贈り物をささげました。しかしこのことにより、真の王の誕生を知ったヘロデ大王は生まれたばかりのイエスを殺そうとします。そのような状況で夢の中に主の天使があらわれエジプトに逃げてそこにとどまれとヨセフにお告げをします。

＜聖書の中のエジプト＞

モーセの出エジプトがよく知られています。モーセもまたエジプト王のユダヤ人赤ちゃんを皆殺し命令のなかで難を逃れました。そしてユダヤ人を率いてエジプトからの脱出を実行します。マタイの描く「エジプト逃避行」はこのモーセの故事を意識しているのではないかという解釈があります。ユダヤ人のエジプト感情はちょっと複雑といわれています。感謝するけれど憎くもある、私たちにとっての隣国である中国にたいする感情と似たものがあるかもしれません。

＜ナザレへ＞

テキストはヘロデが死んで、ヨセフに夢のお告げがありエジプトからイスラエル、ナザレに帰還するいきさつを記します。ベツレヘムからエジプトまでは東京から大阪ていどの距離があり、そのあいだには難所のシナイの荒野、砂漠がよこたわります。生まれて間もないイエスとの旅は容易なものではありません。しかし、ヨセフは夢で天使のお告げを聞いた直後の夜半に出発します。

＜ぼやかないヨセフ＞

マリアに比べて影のうすいヨセフですが、エジプト亡命に際しての果敢な行動力、そしてイスラエル帰還時ではアルケラオ統治下の危険を察知し、ガリラヤに退くという冷静な判断力も伺えます。アリアとの結婚のときもそうでしたが、イエス誕生後の困難にもいっさいぼやかず、愚痴らす、つぶやかず、神のみ心のとおりにすばやく行動し、そして実現する一家の家長、立派な男

として描かれています。

＜聖家族は教会の初め＞

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。
マタイ 18:20

イエスの生涯を描いている福音書には聖家族イエス・ヨセフ・マリアの一家のほのぼのとした描写はありません。わたしたちが甘く夢をみるような家族の日常はみあたりません。イエスを中心とした集団、イエスを守るために力の限りをつくす男と女、ヨセフとマリア、もちろん家族なのですが、それ以上のものを感じてしまいます。

わたしには聖家族は教会のはじまりのように思えます。

＜ヨセフの行く末＞

教会はイエスの弟子たちによりペンテコステの日に誕生したと説明されています。イエスの死と復活を述べ伝えることを目的とした教会の始まりはペンテコステ・聖霊降臨日であることに違いはありません。しかし、イエス生誕そしてイエスを支える家庭の誕生の時にイエスを中心とする共同体が始まった、その中でもヨセフを通して想うと聖家族こそが教会の初めだったと強く感じます。

マタイ福音書ではヨセフはきょうの記事を最後に姿を消します。地上の父としてのヨセフの使命は幼子イエスを育て上げることでした。姿を消すということは役目がおわったということでしょう。伝承ではヨセフはイエスの公生涯の初まる直前に死んだと伝えられています。

＜さいごに＞

聖家族、とくにきょうはヨセフを想い、祈り黙想して結びとします。

「生活の労苦を乗り越えて、ともに永遠の喜びに入ることが出来ますように」（本日の拝領祈願より）

しばらく黙想しましょう。